



Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) on a vertical strip of paper. The characters are difficult to decipher but appear to be a title or author's name.

中村俊定文庫
文庫 18
101
2





孫右衛門

秋之部



月色とぬるるもよの秋男七友 風虎
 天川あゝもぬるるもよの秋男七友 自悦
 早合や勢ゴ女ゼとるるの系とん 嵐雪
 権を四にニつゝるるの系とん 権花
 夕野や船川とるるの系とん 綾戸女
 大内れかゝりぬるるの系とん 千子女
 早合やおれぬるるの系とん 壽閑

正

後思

夕夕よかきぬ縁の秘をけ外 由之
早合也女乃ゆりて新いんん 其角

贈桂茂堂

舞よ曲々念ひ乃一つうれ 露沾
暮也や時乃日氣のくすし 紋足
暮の二人 杉風

驚夜雷

よに晴々暮夜雷に潔イサキヨ 其角

寄李下

いぢりもをいぢりも 芭蕉
いぢりもやあまの山あゆむ川向 岩泉
いぢりもやわたりて 湖風
いぢりもに月をさし 魚兒

遊女とていぢりもを
いぢりもとていぢりもを
あまの山あゆむ川向

露烟は母乃おのまらげ外 去來
父母の氣灯菴物もぬえ外 由之

かきくはくはく 数々を幸かすに折なり 金峯
ふるく 魂乃あふよ 粟くふ 嵐くは 文樵

夜をききめく
びんづくに衣
こころをさかんく

女 餓鬼すく 盆今くまの 邊やけのた 文鱗
盆とらひ 秋やうを 門乃 灯籠か 嵐雪

貧

魂やこん 糸くぬ 宿く聊 蚊足

對愁

ここのあきく 八や 隣乃 ぬふ 具角
ちりちり つかの ち 食れ 親ごらん 同
あつち 火乃 山い ちの あれさ 観水
朝つらん 浦つろ 子れ けさ 玉 苔翠

志かすのらた 周く

くれさのい 中く 踊に 舞たり 自悦
躍ふよ あすの 白乃 州あうん 去來
盲月色 艇ちりく 玉火くれ 春雷
吹くや 水乃 一 偶や 水や 雲乃 苔翠

とせ物てふるもあめいあ外 春雷

禪師よまのこ

おさつこころもの物 女帝記 文鱗

遊女の酒の抱ける

ゆきを充つ乳のこころはくん 同

かゆもあまのほの花はるの 景道

下園をさるゆきは乃一歩の 冬柏

常陸一はゆりく

常舟のゆり起るる物戸が 全峰

つたの秋草にふしあく船さる 曾良

秋のや一歩のやせ山乃大 芭蕉

旅宿

も程短ふらんさうくに舟入り 観水

入湯の比

夕秋のつゆにんく入湯顔井 紋水

もかまふ中

秋を促すくちあまを放つ雨 舉白

鶴鳴くまにるある山外 同

山麓の秋の
紋水

兄去来の

伊勢へ詣ける
初詣の

伊勢のよき
女子

まの草の
同

うけふる
治荷

聴閑

叢生れ
芭蕉

やうし

何も
嵐雪

の
治蓬

聖護院の
親王

入

峯入の宮
宗因

の
具角

早稲酒
鹿谷

さ
野水

さ
具角

是下わくく富きんる此れかしか
紋水
秋の野やんふ今ふ多切心馬
虚谷
世中やわらわらへて早下
風虎

草庵乃月見

名月や池をめぐりおとす
芭蕉
雲影しし人を懐ゆる月見か
同

海防に訪ゆる宿根本寺

ちりにて深き仔細る月見か
同
名月と戸のて又も庵んか
松風

月見とて蚊のあつよらるるか
季下
舟人かあつても月見とて
観水

月下獨酌

月見とて葉をア妻かして
蚊足
月露さらけ切にはくく青か
巴風
ちり連しとも東にくく月見
去來
舟人かあつても月見とて
野馬
月見とてに舟人か
孤屋
橋の月見とては
破笠
橋の志る

宗鑑の御筆の御歌

貞室よりきたらむ御歌
新よりの御歌

古袴月よ舞、我をよと月か 文麟

暖房の御歌

おのの御歌
仕ひの御歌

月のそらに我里人のまをらん 去來

月より富をそらに 冬市

月満く揃千々々 由之

音より啞乃からゆふ月 去來

名月や御堂に鼓のりてゆく 其角

良夜雨意

いとよひもつや 十四日 同

尋常にたり月をよと月か 彫棠

月撰人より御歌

関をよと月か 震谷

承教より御歌 魚兒

商人をよと月か 文麟

名月や露のいある土に 且只

名のなきを痛くわすて鳥は乱る
あはれなきを痛くわすて鳥は乱る
中よわく月一箇や宵のき
くら月の汐よわくく小舟
鉤さくしげよわくく月又
名月や月がな月かいつあ
秋の夜をながく多さくわ痛く
一さくわりゆきぬあはれをわ
濁水もあつれきさ
幻叫
木下

秋さくわよ夜なほ小旅のや
長かき物も旅くさしむた袖
麻かきてをくわわり破
旅人よ村とてをくわわ外
山里や磯よかたるく又
子れ泣くをくわわむ石
あはれなきを痛くわすて鳥は
去來
破笠
全峯
松風
山川
蚊足

一
の
書
に
一
角

砧をくくるとはよすては坊事 芭蕉

獨床

をり居く砧を笈よし用ひし 西比

秋興 廿四句

面白く物うきりのふ砧を 露荷

竹を遠く緋乃雨 廿四句

榎を敷く窓の窓は月し 廿四句

筆片一ひり 睡るひひ土 荷

ちりくを雲ありく心 襟巻 日

くしらの包へ鷹居ては 角

山寺の扇をひらけりし 荷

空ゆく雲ゆく暮病の起臥 角

新交鳴子をけりし 瓜作り 荷

串あがりし河津の産あり 角

夕陽の道志馬はよ離れ 角

葉やうへ 三石の葉 角

先獨也ぬき人さのりて
荷

酒買ひしりるる夜の
角

水ゆり橋の上より細行る
日

遊習ひしあそびの船の子
荷

夕月小急河内をくぐりて
角

多くぬ戸立る電光石火
荷

長客ふに姉の書ふ心
角

召はれ奉り小粒ひきり
荷

御盃初りさるる初極
角

甲子乃速歌いらの大和歌
荷

と波あると傘ぬる人懐月
角

牛のゆきと暖うかひ方
荷

重九

三十九

あそびたれつらむをゆく暑茶
蚊足

四十

年既よ言葉たりあそび
同

菊七情春にありて秋も
露沾

御園より胃がらんと菊あはせ 巴風
年へのの香もや一水の氣 衛門
篇鳥のゆふたにそと 蘭の菊 其角
菊枯く家と水くわぬくれ 岩翁
いづくふ七ナラフ百九呼を菊に強ん 其角

艸菴雨

起ある所菊ほのゆや水のあと 芭蕉
瘦おのろくわらぬれふ菊れつ百ナラフ 同
雨きくし地よ這菊みえおん 其角

雨敷日市ハかゝる我菊のふ 文麟
強り

露雲れいがあるとも 経るに 観水
花粟よ萱ゆきかゆる風くれ 透雲
いゝるに甲斐ある信や椎の音 岩泉
おくれかゝるあや椎乃九折 三翁
耳ふる夕月ぬもりの花雲界 観水
童さへ拾 徑乃いそり外 同
柞ほく松草みえあわく如 魚兒

松茸やねぐり奥丸鷹がた 孤屋
ね茸や一日くくろるたや 三翁

京出旅日

片腕をまよとにゆすみ余介 寺角
ろちりやくはさる掃き松介 同
谷ひらり里餉まらるみ余介 冬市

薇江

紫書や梢のころころ松の葛 巴風
家神れをさほせの村時多 薄雲

牽けね躰あ ー の夕外 冬市

秋山二首

甲斐友かもしもん恋す秋の夕外 露沾
秋山や弱もゆるめ鞆乃と 其角

閉門覓句

秋をく日土圭るも旅飛うれ 三園
ねのまきく菊鶏はよ垣の中 舟竹

秋盡

河の入に縄乃すれよ秋の昏 不炊

こころのきりぎりすもよもやのりれ 一鐵

六客 歌仙

述懐

破笠

元食もりのかたはあはせぬしんか

その秋を責め出せ囁き 具角

ももこの秋は憎む音をたし 全

月よりゆりせうき茶の飯 笠

此身もよもりの暮の雪 同

心の中を無敵のけし子 角

終

人たれを戀する色入上り所々 角

別をいふこと床を金めく 笠

名うそ名隠をさうりさうりく 同

あつともうつく味よまきあか 角

鍋よりて筑士の市めうひひと 月

色酒のせよそのを+瓶めく 笠

川の中火焼くみしり波もくく 同

けり捨るふく羽の箱磨スリ 角

新ゆも笠る宿る天う下 月

松を産所よむそ月
 朱買ふゆそ却しむのそ
 雪消をむる甲斐のそ
 夢乃らむかむや堂を
 死出入鳥の蠟燭を喰
 し名し是園の捨子に啼結り
 流もてりいそめ髪結
 暮を躍しぬらんそか
 病もつこゆかけの乾

笠 同 角 同 笠 同 角 同 笠 同 角 同 笠

秋教
 月ゆく僧と隣に吐く
 佛本どうし曉をす
 定め形そ羨儀の各銀お納め
 鐘 濁よあそん松もつ山
 癩ものそ富の世を悟り
 染のそ帰く維摩のそ
 乞舞よ度唐ゆるそ如の風
 名乗るれそ帯園を
 さ月侍加茂の祭れるそ

笠 同 角 同 笠 同 角 同 笠 同 角 同 笠

癩^{シヨリ}瘡^{カサ}ととと 柳^{ヤナギ} 以^{ヨリ}て 角^{ツノ}
かつとを 軍^{イクサ}の 神^{カミ}。 苑^{ヰン} 朽^ク 同^{ドウ}
春^{ハル}を 以^{ヨリ}て 大^{ダイ}宮^{ミヤ}司^シの 烟^{エン} 笠^{カサ}

下古

曾^{ソウ}久^ク義^ギ那^ナ之^ノ之^ノ梨^リ

不^フ極^{キョク}乃^ノ部^ブ

十月十一日 餞^{シヅメ}別會

猿^{サル}人^{ヒト}と 我^ガ名^ナを 以^{ヨリ}て 人^{ヒト}妙^{ミチ}齋^{サイ} 芭蕉

亦^{モト}々^々人^{ヒト}也^ヤを 宿^{ヤド}く 由^ユ之^ノ

鶴^{カズ}乃^ノ心^{ココロ}を 世^ヨの 其^{ソノ}角^{ツノ}

糺^{ササ}色^{シキ}を 舍^シて 内^{ウチ}山^{ヤマ}陰^{カゲ}の 鷹^{トウ} 松^{マツ}風^{カゼ}

いづれあつて 芝^{シバ}生^ナの 島^{シマ}の 海^{ウミ} 録^{ロク} 文^{モン} 麟^{リン}

新^ニ舞^{マヒ}臺^{ダイ} 月^{ツキ}を 以^{ヨリ}て 仙^{セン} 化^カ

中の秋盡エカキユ一つさかへるあはれ 魚見

舟ウ新フしりしあめくる瀬舟カラ 観水

那垣や北フなひくさ波のひま 全峰

嶺と御フ出フるうみ雲 嵐雪

酒のこよさゆもあまの並フ病フ 孰フ葉

卯月のまを握フつくりぬ 翁

鰯フつる袖フつくばうりうみ川 由之

蘿一面フのころ橋杭 具角

道あはれを望フみ破フをかりまじり 松風

月もや啼フん泊瀬の菟コモリト 文筆

葛フ々フく白フひと都フりつ 仙化

かゝるゝぬるもを初フめ愧フ偏 全峰

途ミチ中フまフらフる車フのフ巻フをフ巻フつ 翁

沖フく舟フのフまフれフをフ誰フ 由之

花フゆフる君フのフ舟フ情フをフ見フつフら 嵐雪

別フるフ雁フたフくフ日フ琴フれフ手 舉白

花フのフ名フをフあフらフまフせフのフあフまフ入 観水

萱フ乃フのフゆフけフのフ花フ雪フをフ焼フ家 仙化

老の力乃繩ありのほりゆるりたる 由之

若流よれ 跡の園を 翁

の暮を千瀉の松をかきくは 翁

命成りく 船中 遠 蟹 斗角

起出くもみはらん海のこゝ 吹雪

志くを御身はぬ新むらぬ 龍水

藤や石の心坂中目あり 全峰

小畑より 山子 松風

岫の戸をくると酒債サカテはかきくは 翁

つとみ心星を味ひのめら 翠白

薫の志ありと面白く夕涼み 仙化

懺い〜〜〜〜〜戌の天王 具角

所收は乃笛吹やみ 壺 全峯

信く〜〜〜〜〜勝ふこみ杖 松風

ん〜〜〜〜と文字の子昂く味く 松風

堀乃錦 蜀をあり〜〜 嵐雪

隠あや寄出カサリナのなま交りあえ 龍水

後より出〜〜〜 翁

谷深より日うつらむの木同の
春乃山より 由之

芭蕉庵全四郷

町をさる野をこらり 露沾

鳥中を送る

もろくのよき奥乃頭中か 素堂
尚もの中へ瘦めく 不ト
もかしのつらし 嵐雪
町を鳥富をこらり 杉風

比まわ大井乃嵐佐夜の素 蚊足
栞をそそけりてふらんそ氣乃素 仙化
露森とく紙小二つハぢりし 枳風
氣每れ紙小やねもこおれの松 李下

白あり

ぬこさんあく送りゆさん町あか 文鱗
町あくに益かりあらん州乃房 舉白
お根山志とれなふ月を影ひかり 由之
蒲園借ス女もあ 旅の如 露荷

萩枯ぬもりの紙箱をこいで 沾蓬
宿るれをぬ消る雨の影茶めせ 如泥
その白をけちるうらほされか 溪石
みづれをぬう首途や花の雪 其角

詩歌文章一巻

志とれづくをんりきり入りか 杉風
眠りもあつからぬにりてやす可るか 沾蓬
そよわしんよこほろく志とれか 去來
よこさげんわよかきりぬ可るか 蚊足

蝶のわ乃遊遊よとゆ杉風か 朱市
蝶のうらまえて舞ひあはれか 為睦
ゆふく入る葉集ゆ山風か 枳風
牛池の蹄ぬくはも葉をぬ 好柳

深川夜泊

ふりしや夜の本息よひてぬ 李下
枳のやあしつりて心りぬ 巴風
あつ枯るく月よあまる 飄うあ 同
松苗も枳世も月らぬか 枳風

萱屋の夜あけけりりるあを
心志休備とわらふらんあゆみ
ト子

琴風

甲斐の山

中宿り

刀さげしあやしと我の地蔵が
破笠

とつるあやなふと何鐘の色
野馬

えれ下りしせきとつらと
尔中

古寺れ新よつとと
吼雲

芭蕉の道松色と霜のむ盛
素堂

對巻

我旅の氣を忍びし月乃色
好柳

和歌柳子

人をとんたれしわの夕涼
其角

をのう酒漬をのこ純賣
好柳

塩ゆり那く感の松も好
由之

夜坐 一句

何れゆくあな水隣をさるる
其角

うつら火ふ芽やくんか薫ス
同

好花乃くつく火のくすし洞の
明くく世回ハ寒くく
炭くく心育く氷く炭身少
灯乃新の類すひく火燵少
燈を續く命運く楳の蠟
炭竈くくくく短く法師が
茶の毛も炭くくあきんすく
巴風

紋水

蚊足

嵐蘭

魚兒

似兮

不炊

寒暄

情をれておくく人冬の暄

其角

聖樂無有慧心

法華をやくけりく
此くあくく報もあくく火燵少
後かきや門通くみもくく
嵐雪
景道

宿僧房

あきくく 厨伽の抄教く 冬業
菊形子燈身印くくや空念佛
川乃くくく 水空寒くく
晴乃くくけくくあき念佛
星ひくく五位一くくあき
其角
三園
湖水
其角
湖春

夏夜中 浮橋くあるあまの山 冬柏
水多の朝日蹴らるうわりの山 由之
あの男袋あふれるうたあとい色 山夕
鈴あるゆ鷹の暗入る尾上哉 冬市

十二月九日とら言解り

初まの幸 菴 ふらふら 芭蕉

あまの山

あまの山 あまの山 同

山夕の夕

あまの山 あまの山 露沾
猿の市 サケ 占荷
窓の あまの山 魚兒
あまの山 あまの山 孤屋

反静亭とてあまの山

比良乃言 未齋 あまの山 自悦
あまの山 あまの山 文鱗
あまの山 あまの山 燭子
あまの山 あまの山 自棄

初春に月をとりてくゝ篋竹外由之

戸路占公より初春

くつをて盆にもくくを縁外其角

ふれ朝言るにむく

月比とく敷も初春ありたか露沾

漸るるくつたけにほる炭露荷

珍絹張の籬の竹をくく其角

狭居カ

二すじとげとくくく道の名沾徳

ふれくとわたりしとく初春あり安重

辛淡に好むくく雪れ縁外観水

くく竹や汐乃千得の石を雪蚊足

圓のわや初とく雪をく初魚兒

慶運、髑髏やくくく雪れ其戸紋水

夜ありくや夜祈を拂く雪れ孤舟

初春に川長くとくくく雪れ仙化

白川や圓く雪あり雪れ東頃

草庵

門の雪梅ありやと訪れあり 其角
雪れりや梅あり日此の道あり 全峯
岐のくし雪あり規と人あり 枳風
門のふ傘ありくくはれは 斧鉞
雪深し 柳^{ハアラ}白ふり梅 鈎雪
梅を折た笠もくくや雪裏 二齋
猶金れ梅よりくく冬の梅 露沾

湯成五倫

君臣有義

其角

家のまきくくありを忘るれは 其角

父子有親

鮎汁や梅をくくはれは 其角

夫婦有別

神はくくめれやありは 其角

長幼有序

袴着の娘乃ありは 其角

朋友有信

かゝる我婦にくく返すは 其角

水鳥のこゝろをこゝろとてん
治荷

節分

豆をわく我とんれ鬼とん
野馬

市よ入るもさしんを原を外
素堂

うきをなすれよさる所非し
魚兒

碓よ新少い存るし
紋水

室乃津よ是儀をさす女啼を
如泥

子を祀す

羽子板よとらふ人を新お原を
露沾

歌をいふ乃たうと所を
文鱗

淋とそを新よある所を
枳風

けりあやつりれ海を
孤屋

年の世や人よとらふを
去來

ふたたの

恙れく大晦りれ
蚊足

市よあふ市の興や
舉白

たふくもや泣き笑り
嵐雪

年の市線香買りに
芭蕉

閑

年の一良王子の狐尾にゆん
晦月くや序念の入て大晦日
月雪とのさちわきしつる昏
芭蕉

年くろ梅

のあももといくつなまへだしのれ
其角

貞享丁卯歳霜月仲三日

日本橋万町万屋清兵衛彫行



1923
大正十三年

